

日蓮における病の超克

立正大学准教授 田村巨禰

日蓮は、釈尊滅後二千年以後（末法）に仏法が壊れ、人類が破滅に向かうという末法史観を持つ。かかる末法において、『法華経』の題目妙法五字への帰依によって日本乃至一閻浮提の根源的救済がなされると日蓮は信じた。日蓮の病観および良薬観は、この末法救済観とダイレクトにつながっている。日蓮は、末法における衆生の重病として謗法（誹謗正法。他宗信仰。念仏、禅、真言、律）・一闍提（無信心）等を掲げ、これに対する良薬として『法華経』の題目を勧奨する。

日蓮における病の説示には総論と各論があると言える。総論はすなわち末法という時代の同一の苦（疫病―謗法の病）、各論は檀越個々の病である。そしてこれを救済する良薬は、一貫して『法華経』、なかんずく題目妙法五字であるとされている。各論と総論が融合している例として『太田入道殿御返事』が挙げられる。太田入道はかつて真言密教の信仰を有していた。日蓮は、病痛に悩む太田入道に対し一度は嘆くが、却って祝福すべきであると悦ぶ。その理由として『維摩経』『涅槃経』『法華経』を挙げ、『摩訶止観』では「維摩居士は毘耶梨城の自邸で病氣と称して床に伏し、病氣に託して菩薩の化他行を説いた。また仏は肉身の入滅によせて法身常住の法門を談じ、病によせてその力を説いている」と積している。また『止観』により病氣の起こる原因六種を挙げる。「一には身体の構成要素である地水火風の四大が調和しない病氣。二には飲食の節度を欠くための病氣。三には坐禅が定められた通りに行なわれないための病氣。四には悪鬼の障りによる病氣。五には天魔の仕業による病氣。六には前世の悪業が現われるための病氣」をいう。『涅槃経』には「世の中に治し難い病者が三種ある。第一は大乗経を誹謗する者、第二には五逆罪の者、第三には一闍提である」と説かれる。また「現世で悪業を犯すと来世には必ず地獄に堕ちる。しかし仏法僧三宝を供養すれば、地獄に堕ちず現世で軽い報いを受ける」とも説かれる。これらを承けて『止観』には「もし重い罪業があつて地獄の重苦を受ける場合でも、この世で軽く償うことができる。これは、前世の罪業が今世においてなくなろうとするための病氣である」と解釈されている（転重軽受）。さらに『大智度論』の『法華経』による変毒為薬を引用し、『止観』に「法華経は、他経では対処できない二乗を治するので妙と称す」とある。また『涅槃経』における阿闍世王の悪瘡を、釈尊が月愛三昧に入り治癒させた事例、『法華経』の「此経即為閻浮提人病之良薬若人有病得聞是経病即消滅不老不死」を引用する。そして日蓮は、太田入道の病を勘えてみると、前の『摩訶止観』第六の業病、中でも『法華経』を誹謗した結果得る業病が一番重く、古代の名医も治せず、ただ釈尊だけが『法華経』の良薬で治されるとする。『涅槃経』の中で『法華経』を指しているには、「もしこの正法を謗っても、心に自ら悔い改め、正法に再び帰って信仰するなら謗法の罪は消える。ただしこの正法を除いて外には、謗法の罪から救い護るものはないのだから、必ず正法に帰らなければならない」とある。それを指して荊谿（妙楽）大師は『法華文句記』の中で「涅槃経は自ら法華経を指して至極の正法とする」といい、また、「たとえば大地に倒れた者が、再び大地を支えとして起き上がるようなものである。つまり正法を謗ったことが縁となり、却って地獄から救われる」と説いているとする。このように日蓮は、『法華経』至上主義の業病救済観を示している。

〈キーワード〉末法、謗法、題目妙法五字